

市民
プレス

SHIMIN PRESS

4 月 5 日 第 60 号

「市民フォーラム」

原 昭二

デジタル工房

hara@camelianet.com

090 (3048) 5502

埼玉県志木市本町 2-4-43

市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN

http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

-PAGE 1

文武両道に傑出した この人
太田道灌（その二）
山吹の里を巡って 道灌への謔言
太田道灌謀殺される その後の江戸城は…

-PAGE 2

江戸郷の魅力を探る！
室町時代・江戸の史料は
そのころの西国では…

-PAGE 3

静勝軒に掲げられた『詩板』を原文で読む
室町時代・足利義政が築いた東山文化

-PAGE 4

西域紀行 その2 深瀬 克
一気に進む近代化 ウイグル人問題

首都圏は春爛漫！

隅田川畔の桜とスカイツリー

2011 年



2012 年



波乱万丈の室町時代！

朝廷、公家の政権に、武家が介入して成立した鎌倉幕府は、元弘三年（1333）、北条氏が滅亡して終結し、後醍醐天皇による親政が復活した。

しかし足利尊氏が叛旗を翻したので、朝廷は吉野に移り（「南朝」という）、一方尊氏は、異なる皇族の系統から光明天皇を即位させ、延元三年（1368）、自らは「北朝」から征夷大将軍に任じられて、足利幕府は成立する。

三代将軍となった足利義満は、有力な守護大名の勢力を押さえて幕府の権力を確立、天授四年／永和四年（1378）、京都室町に将軍邸を造営した。世に『花の御所』といわれる。三年後に豪邸は完成し、公家社会に対して幕府の威勢を誇示するものとなった。元中九年（1392）、南北朝の合一が成り、六十年に及んだ「南北朝時代」が終結する。御所が所在する「室町」に因んだ室町時代は、本格的に幕を開けた。

ところが、応仁元年（1467）に勃発した「応仁の乱」は、華やかな京都のほぼ全域を消失してしまふ。文明九年（1477）になって戦乱は終息し、また東国でも、幕府と鎌倉府との和議が成立したが、明応二年（1493）、足利将軍の廃立を巡る争い（明応の政変）が起こり、ついに世を「戦国時代」へと誘導したのである。

文武両道に傑出した
この人 太田道灌 その二

「山吹の里」を巡って

太田道灌は、幼少時から英才の誉れが高く、それを物語る逸話が人口に膾炙している。まず「山吹伝説」の筋書きは・・・

父の道真を尋ねて道灌は、越生の地に來たのだが、突然の雨に遭い、蓑を借りようとする農家に立ち寄った。すると、娘が出てきて山吹の花一輪を差し出した。道灌は、蓑を借りようとしたのに花を出されて当惑した。ところが、この話を家臣にしたところ、それは後拾遺和歌集の「七重八重の花は咲けども 山吹の実の一つになきぞ悲しき」（兼明親王の歌）に掛けて、山間の茅葺きの家に住み、貧しいので蓑（実の）一つ持ち合わせがないことを、床しく答えたのだらう、と教わった。古歌を知らなかったことを恥じ、それ以後道灌は歌道に励んだという。



東京都北区指定有形文化財

越生町（現埼玉県入間郡）西和田の山吹の里歴史公園のほか、豊島区高田の神田川に架かる面影橋の近くにも山吹の里の碑があり、その東方、新宿区内には山吹町の地名が残されている。

越生町（現埼玉県入間郡）西和田の山吹の里歴史公園のほか、豊島区高田の神田川に架かる面影橋の近くにも山吹の里の碑があり、その東方、新宿区内には山吹町の地名が残されている。

道真は小杉の郷の隠居所へ

太田道灌が、鉢形城主の長尾景春を追い落として武蔵北部の勢力基盤を固めると、父の道真はすでに高齢であつたので、越生の小杉に隠居所「自得軒」を設けて隠棲した。

文明十八年（1486）六月、道灌は父道真を越生に訪ね、その居館自得軒で詩歌の会を催した。江戸城に滞在していた詩僧の万里集九も同行した。翌月道灌は非業の死を遂げたが、集九はその後も越生の道真を訪れ、また道灌の子太田資康を菅谷の館（現・比企郡嵐山町）に訪ねている。

明応元年二月、道真は八十二才の生涯を閉じ、龍徳寺（現・越生町龍ヶ谷に所在）に葬られた。

木造太田道灌坐像

太田道灌への謔言

破竹の勢いで連戦連勝した道灌の活躍によって、主家、扇谷上杉家の勢力は大きく前進した。それとともに、道灌の威望も絶大なものになった。

『永享記』には、道灌が人心の

ころを曾我兵庫に襲われ、斬り倒された山内上杉家に対して謀反を企てたと記し、また、扇谷上杉家の中が江戸・河越両城の補修を怪しめ、扇谷上杉家の定正に讒言したとも記されている。これらの中傷に對して、道灌も父道真も一切弁明しなかったという。

ただし道灌が、主家の冷遇に對する不満を吐露した手紙が残されていた。「太田道灌状」は、文明十二年（1480）に、扇谷上杉正が乗ったともいわれる。『上杉氏の家宰だつた道灌が、山内上杉定正消息』の中で扇谷定正は、道灌が家政を独占したために家中に不満が起こつたこと、また道灌が徳の乱の後期）における彼自身の活躍ぶりについて記されている。全三十九ヶ条にもわたり、彼の功績を正当に評価しない主家に対して、不満や苛立ちが込められていた国人や地侍の多くが山内家へ走つたので、扇谷定正はたちまち苦境に陥ることになった。

古河公方成氏に預けている。太田道灌謀殺される・・・

ときは文明十八年七月二十六日（1486／8月25日）、扇谷定正の糟屋館（神奈川県伊勢原市）に招かれ、道灌はここで暗殺された。享年五十五才だった。法名は、大慈寺殿心円道灌大居士、また香月院殿春苑静勝道灌大居士。

『太田資武状』によると、道灌は入浴後に風呂場の小口から出たと

『梅花無尽蔵』の中で「江戸城の乱」と呼んでいる。

その中には、丁未の年（文明十九年）の正月、「江戸城乱後、上杉匠作（修理大夫Ⅱ定正）が催した会席」で作つたとされる詩が載せられ、同じく道灌の没後に江戸を去る決意をした起雲という人の送別のために作つた七言絶句の中に「角声昨夜俄吹起、一別送君梅河越城に落ち延びた。」

以前」という語があり、梅が咲く季節（旧暦の十二月）の前に城内で戦火が起こり、城主が交替したことを詠っている。

長享の乱とその後・・・

翌、長享元年（1487）、扇谷定正と関東管領の山内顕定との仲は決裂し、顕定の攻撃によって戦端が開かれた。両上杉家は、永正二年（1505）にかけて抗争を繰り返して、さらにその南には六浦（金沢）をを経て、鎌倉に至る水陸交通路が、あつたとされている。そこで今川氏の客将・伊勢盛時（宗瑞ともいい、号は「早雲」）の関東進出を許す結果となつたのである。後

の時代には、北条氏の初代、北条早雲と呼ばれるようになった。

北条時代の江戸城は・・・

早雲の嫡男だつた氏綱は、伊勢氏を北条氏（鎌倉時代の北条氏と区別して、「後北条氏」といわれる）と改め、大永四年（1524）には相模を平定、武蔵進出のた

めに扇谷上杉朝興と高縄原（現

この合戦に敗れた朝興は江戸城に退却するが、江戸城を取り仕切っていた太田資高（妻は北条氏綱の娘）が北条氏に内応して、北条軍を江戸城内に導き入れたため、朝興は江戸城を放棄して入城した氏綱は、本丸に富永政直、二の丸に遠山直景、香月亭に太田資高・康資父子を配置し、その後は北条氏の有力支城として機能した。なお北条氏の時代にも太田道灌の江戸城のシンボルだつた「静勝軒」は残っており、「富士見の亭」と呼ばれていたという。

江戸城の南には品川湊があり、さらにその南には六浦（金沢）を経て、鎌倉に至る水陸交通路があつたとされている。そこで今川氏の客将・伊勢盛時（宗瑞ともいい、号は「早雲」）の関東進出を許す結果となつたのである。後

の時代には、北条氏の初代、北条早雲と呼ばれるようになった。

北条時代の江戸城は・・・

早雲の嫡男だつた氏綱は、伊勢氏を北条氏（鎌倉時代の北条氏と区別して、「後北条氏」といわれる）と改め、大永四年（1524）には相模を平定、武蔵進出のた

朝廷、公家の政権に、武家が介入

して成立した鎌倉幕府は、元弘三年（1333）、北条氏が滅亡して終結し、後醍醐天皇による親政が復活した。

しかし足利尊氏が叛旗を翻したので、朝廷は吉野に移り（「南朝」という）、一方尊氏は、異なる皇族の系統から光明天皇を即位させ、延元三年（1368）、自らは「北朝」から征夷大将軍に任じられて、足利幕府は成立する。

三代将軍となった足利義満は、有力な守護大名の勢力を押さえて幕府の権力を確立、天授四年／永和四年（1378）、京都室町に将軍邸を造営した。世に『花の御所』といわれる。三年後に豪邸は完成し、公家社会に対して幕府の威勢を誇示するものとなった。元中九年（1392）、南北朝の合一が成り、六十年に及んだ「南北朝時代」が終結する。御所が所在する「室町」に因んだ室町時代は、本格的に幕を開けた。

ところが、応仁元年（1467）に勃発した「応仁の乱」は、華やかな京都のほぼ全域を消失してしまふ。文明九年（1477）になって戦乱は終息し、また東国でも、幕府と鎌倉府との和議が成立したが、明応二年（1493）、足利将軍の廃立を巡る争い（明応の政変）が起こり、ついに世を「戦国時代」へと誘導したのである。

文明九年（1477）になって戦乱は終息し、また東国でも、幕府と鎌倉府との和議が成立したが、明応二年（1493）、足利将軍の廃立を巡る争い（明応の政変）が起こり、ついに世を「戦国時代」へと誘導したのである。

江戸郷の魅力を探る！

五百五十六年前のことになる・・・

太田道灌は、衰退の道を辿っていた江戸氏を江戸郷から追放し、長禄元年（1457）、中世の城郭としての江戸城を構築した。そのころ、室町幕府の出先機関でもあった関東管領の勢力が分裂し、争いは各地に広がり、武蔵国全域が戦乱の巷と化していた。

江戸城の完成によって・・・

鎌倉から古河に移った「古河公方」を支持する勢力に対して、山内、扇谷両上杉家は、利根川水系を挟んで対峙していた。扇谷山内家の家宰を務めていた太田道真は、当主持朝の命によって、防禦の拠点を構築することとなる。父の道真から家督を相続した道灌は、康正二年（1456）、江戸築城に取り掛かり、一年後の長禄元年にこれを完成させた。

道灌は当時、品川湊に面した御殿山（港区・品川区の境を占める台地）に城館を構えていたといわれ、ここから江戸城に移転した。

江戸の魅力は・・・

江戸氏が開いた江戸湊の繁栄や、物資輸送のための水利権などがあつたので、江戸のまちに居館を移すことによって、道灌は、これらを手中に収めることにも成功した。現在の日比谷付近は入江で、その東側の「江戸前島」は当時、強大な勢力をもつ鎌倉・円覚寺の寺領だったので、その了解なしに江戸には入れないはずなので、彼は円覚寺の備兵隊長としての役割をもって移動したらしい。

その頃の史料は現存している・・・

当時の貴重な記録を残したのは、序文は蕭庵電統。詩を村庵雪彦、雪樵、景庵、黙庵竜沢、補庵（横川）景三。跋文は村庵雪彦が記した。また、招かれた著名な詩僧

漆桶万里（また万里集九ともいう）は、二年近くも江戸城に滞在して、城内の出来事を生々しく語っている。

五山の長老は、当時の日本と明との外交と貿易の責任者として、実務にも明るい「経済僧」の性格をもっていたといわれ、これらの人々は、当時の宗教、文学の最高峰とみなされていた。

太田道灌は自ら兵力を持たず

いわば傭兵をもってする戦術家だった。したがって、武将としては一傭兵隊長に過ぎなかった筈である。しかるに長老たちが、彼の求めに応じ、詩文を提供したことは、道灌の財力が並のものではなかったと推測される。

築城後二十年余り、道灌による江戸のまちづくりによって、江戸湊の交易が、彼の経済力に大きな貢献を果たしたのではなからうか。

室町時代・江戸の史料は

太田道灌は、江戸城の本丸に居宅を設け、その背後には眺望の良い高樓を建てたという。「静勝軒」と名付

けられ、その壁面には、二次にわたって依頼した詩文が掲げられた。それら詩文の全部がいまに残されている。

第一次の詩文は、京都・鎌倉五山の長老に依頼した作品で、文明八年（1476）のことであるが、その九年後には、鎌倉五山、建長寺の住持をした詩僧二人の詩と、道灌に招かれた詩僧の万里集九の本文によって構成された二次の詩板が掲げられた。

第一次の作品は

□『寄題江戸城静勝軒詩序』
序文は蕭庵電統。詩を村庵雪彦、雪樵、景庵、黙庵竜沢、補庵（横川）景三。跋文は村庵雪彦が記した。

□『左金吾源太夫江亭記』

本文は、暮樵得公。詩は暮樵得公、武陵興徳、相陽中栄、河陽東嶺が記している。

一次の詩板には・・・

当時の詳しい江戸のまちづくり、交易の実情が生き生きと記録されている。すなわち

一、関八州で、幕府の勢力下にあるのは三方国、その中核は江戸である。二、江戸湊の海陸のにぎわい、交通の盛んなことは、他に例をみない。

三、江戸城の一方は海に面し、他方は平川で守られ、さらに本丸台地の周りは堀で囲まれており、城門は鉄で固められて、きわめて堅固である。

四、江戸前島周辺には大小の商船や漁船が群がり、江戸湊は日々市をなし、この湊には、「房の米、常の茶、信の銅、越の竹筒、相の旗旗驛卒、泉の珠犀異香より塩魚、漆、梔西、筋膠、葉餅」など、多種多様な物資が集散している。

五、江戸城周辺の有様について記し、南方の品川湊と江戸との間には人家が統いて一都會をなしており、また北に目を転じると、「浅草の浜」の観音堂の「巨殿宝坊」は、数千里の海に美しく映え、聳えていたという。

都市の歴史に造詣が深い鈴木理生はその著書「江戸はこうして造られた」（ちくま書房刊）で述べている。

品川湊と、浅草湊との間に挟まれて賑わっていた「江戸湊」では、日々集荷されて市をなした物資の中で、房州からの米や、常陸からの茶の集荷などは注目に値するのではないかと、

房州も常陸も、ともに古河公方の勢力圏に属する利根川左岸の地であり、「武将の道灌」が当面敵対する地域からの産物である。また信濃からの「銅」の集荷にも、江戸湊の性格が反映されているようだ。

また、鈴木理生は、その著書でつぎのように述べている。

注目すべきは「越の竹筒、相の旗旗驛卒」で、越の竹筒を文字通り解

釈すると矢竹となり、相模からの旗なやり方で訓練に励んでいたという。旗驛卒を「旗や指物を持った騎馬武者と歩兵」と読めば、これは『太平記』の時代から見られる足軽、つまり傭兵の市場が江戸湊にあつたことを物語る。この傭兵の輸出先は多分西南日本各地をへた東シナ海で、「倭寇」要員またはその補充用だったであろう、と。

さらに「泉」からの輸入品目をみると、寶石・香木・高貴薬と、中国特産の高級漆や高級麻をはじめ、染料、ニカワなどの多種多様な工芸品の原材料が運ばれていたことがわかる。この場合の「泉」とは和泉（大阪府）からのものだったのか、中国の泉州（福建省）だったのか区別できないが、中国の泉州からと考えた方が、他の諸例からみて妥当なようだ。

十五世紀の江戸湊でも輸入品に見あう輸出品を用意しなければ、貿易船は寄りつかない。硫黄・日本刀は勿論、それに加えて信濃の銅や越の国や、相模からの傭兵を輸出したことも考えられる。

一方、第二次作品では・・・

□『静勝軒銘詩並序』
本文は万里集九が記し、詩は建長寺の住持をした宗猶軒玉隠、易安軒竺雲が記している。第二次では、道灌が城内に建築した高樓の名称、「静勝」の理念に始まり、ついで彼が争った戦闘経過を述べ、江戸湊と江戸城の景観を描写している。また道灌の軍隊の訓練方法にも触れている。

二次の詩板と一次のそれとの間には、十年もの月日が流れているが、比較すると、江戸湊の様相がかなり違つたものになっていて、湊の活況が衰えてきたことが察せられる。

始めに「静勝」の哲学が長々と述べられ、軍隊の描写は細かく、しか

具体的になつてはいる。城内には軍隊が常駐し、毎日数百人の兵士が様々なやり方で訓練に励んでいたという。

「戈を操り鉦（打ち鳴らす金属の器具）を撃ちて士卒を閲すること再三回」があり、その命令は甚だ厳しいものがあつた。

このように、傭兵隊を具体的に描写しているが、訓練を怠けた兵士から罰金を取るという貨幣の普及のし方は、約五五〇年前の日本としては非常に異例なことで、当時の江戸湊の繁栄のあり方を雄弁に物語る。

「万里集九」の詩文を味わう

まず万里集九の本文を原文・「読み下し」で掲出した。ただし後半は本紙「電子版」に譲り、省略する。

静勝軒銘詩 并序 武州江戸城太田春苑道灌號一 静勝軒。其南掛二洛詩板。其東掛三此詩板。

読み下し・・・「静勝軒の銘の詩、並びに序。武州江戸城の太田春苑道灌は、静勝軒と號す。其の南には洛詩の板を掛け、其の東には此の詩板を掛け。

（一）文之所以爲文。不亦武之備乎。武之所以爲武。不亦文之要乎。其要在靜。則其備必得勝也。

読み下し・・・文の文たる所以は、亦武の備へならずや。武の武たる所以は、亦文の要ならずや。其の要は、靜に在れば、則ち、其の備へは必ず勝を得るなり。

（二）竊惟太田左金吾公道灌。厥先廼丹陽人。而五六葉之祖。始家三州一也。公規二武藏豐島江戸之地。築城壘。從京師連府之命。爲其君一而割據。康正乙亥。一。次頁最上段へて就任した。

三代將軍、足利義満が室町に構えた豪邸「花の御所」は、家格の高い二つの公家、室町家の花亭と、今出川家の菊亭を併せて一つの敷地としたので、広大な敷地の邸宅だった。室町通に面して正門が設けられたことから室町殿とも、また室町第とも呼ばれた。



上杉本陶版『洛中洛外図』に描かれた『花の御所』（京都アスニー収蔵）

足利義政の時代・・・
將軍義政は当初、祖父に當る、將軍義満や父の政策を復活させようと試みた。しかし母・重子と正室・富子の実家となる日野家や、有力な守護大名も政治に介入し、將軍として主導権を握ることが困難であつた。また幕府の財政難と土一揆にも苦しんだ。

そのため、正室の日野富子や細川勝元・山名宗全らの大名に幕政を委ね、自らは政治を疎んじて、邸宅や日本庭園の造営に走り、芸道に執心し、酒宴に溺れていた。寛正二年（1461）の大飢饉は、京都にも大きな被害をもたらしたが、義政はそれを意に介さなかった。

応仁の乱が勃発する・・・
義政には実子が無く、弟の義規を後継ぎに決めたが、その翌年妻の富子が義尚を生んで、將軍に立てようとしたため争いは起こつた。義規の後見には、かつて管領を務めた細川勝元がおり、これに対抗する富子は、実力者の山名持豊（宗全）に義尚の後援を依頼した。一方、力を強めていた各地の守護大名の勢力争いがこれに加わり、応仁元年（1467）京都を中心とする戦乱が勃発する。

土佐・讃岐・丹波などの大名、細川勝元と但馬・備後・安芸などの大名、山名宗全は互いに勢力を競い、二派の闘争は全国的になつてゆく。

京都の本陣の位置関係から、細川方は「東軍」、山名方は「西軍」と呼ばれ、兵力は誇張があるであろうが、『応仁記』によれば、出陣した東軍は十六万、西軍は↓次頁へ

驍眉以來二十有餘霜。高揚帝旗。鞭を着して南より馳せ、將師を引き陣二武之五十子。禍自戯下一起。公之爺、道眞、將師。屯兵於上陽赤城之麗河北矣。戯下兩岐相分。鋒鏑凝血し、雷霆、威を扶く。公、其一者退還嶮於武之鉢壘。有城號鉢形。公在江戸。緩頰慮和。二兩岐。厥學不能達焉。遂守三忠孝之至道。一怒、着鞭自南馳。引將師渡河而出。同於針原。原名針買。酣戰。鋒鏑凝血。雷霆扶威。公凱歌未休。追而圍鉢壘。一。々々求救於東兵。不日其兵鳴鼓而相應矣。公能下量彼我之道。雖不レ及一負レ戸之攻。四面草木無不非敵兵也。當是時、堅守公之符契。不袒敵軍。江戸河越二城而已。不幾東兵鼓聲之聲衰。鉢壘亦潰矣。公以時不可失。出白井。僅率數百餘騎。凌數萬之敵兵。直取江戸。旌旗増色。而後使將師建職於鉢壘。公汗馬之勞。百戰積功。獲三萬全者。爲天下國家而不レ爲私。江戸城爲是起本也。凡關以西之諸侯。望風靡者。往々有之。矧關以東之八州。太平屬指呼矣。

また東側には、この詩板を掛けた。（一）そもそも、文事（学芸）の本質は、武（武芸）の備えをするこにある。そして、武の本質はまた文を要めとすることではなからうか。静かに備えれば、必ず勝を得るのだ。（二）道灌公の祖先は丹波の人で、五六代前に始めて相模に住みついたのだが、公は武蔵国豊島郡江戸の地を定めて城壘を築いた。將軍に命ぜられ、公の主人、上杉定正のためにこの地を占拠したのである。康正元年（1455）、鎌倉公方と山内上杉家とが争ったとき、道灌は出陣したのであるが、彼はそのとき二十四才だった。それから二十余年の後、公は正義の旗を高く掲げ、武蔵の伊皿子に陣取った。ところが、旗本の中から禍が起こり、公の父、道眞は大將たちを引き連れて、赤城山の麓に陣を敷いた。旗本が二派に分かれ、その一つは、退いて武蔵の鉢壘《鉢形城》に拠ったのである、道灌公は江戸に居り、両派を和睦させようとしたが、その計画は成功しなかった。

しなかったのは、江戸と川越の二城のみであった。何日も経たぬうちに、東軍は勢衰え、鉢形城もまた崩れた。公は時期を失つてはならぬと、すぐに白井の陣営を出る。数百騎を率いて江戸に帰り、將兵に鉢形城に旗を立てさせることができた。公は戦場を駆けめぐり、手柄を立て、万全の勝を得た。天下国家の為に働き、自分自身の為ではない。江戸城はそのための行動の基礎となつたのだ。箱根の関以西の諸侯で、公の威風を望んで、これに従う者が往々にあつたが、まして関以東の八州においては、いうまでもない。天の太平が訪れることは確実である。（三）は原文と読み下しを省略（三）江戸城の中には公の休息の部屋が有り、「静勝軒」と云う。西方は、杜甫の詩句からとって「含雪」と呼び、そこに格子窓を透かして外が眺められる。しかも、その戸には直径二三尺の丸窓が作られていて、丸窓から幾千万尺の富士を眺望することができ、朝の雲、夕暮の雲が、わずかの時間だけ見え隠れする。昨日曇つたかと思えば、今日は晴れるといった変化するさまは、詩文の作者も、感嘆の余り物を云えず、絵師も筆を擱くほどである。

西方は、易で云うと兌の卦（吉凶を占うこと）にあたり、兌は沢を意味し、沢は土地が水で潤うものだ。易が、また雷のような響きは威勢を添え、勝どきを挙げたが、なおも休まず、敵を追つて鉢形城をも取り囲み互いに助け合う」とある。この句は、道灌公の徳の恵みがいよいよ豊かになり、万物にまで及ぶことを意味するものだ。

国景を合わせたようだ。易で云うと、東方は震の卦であり、震とは雷を意味する。雷は天の号令である。震の卦辭に「君子は恐れ慎んで身を修め、自らを省みる」とある。この文は、公の命令は厳しく、国家を安らかにして、兵卒を豊かにすること云うのである。「震」と「兌」（つまり、東と西）の両方の扉に掲げた「泊船」と「含雪」の文字は、杜甫の詩の対句から出た語であるが、その意味は、実は周の時代の易經に拠るものである。また「静勝」の二字は、尉繚が著した兵書の秘密計略の中に記されている。そこでは、「戦いは静によつて勝つものだ」と云っている。施子美（施氏は子美は名で、兵書の尉繚子に注を記している）の解釈では「兵法は、厳かで静かなことが良い。そのとき戦いは有利になる。権力によつて一つにまとめることが必要なのだ。一つになれば国はその利益を得る。肅々と往く馬、悠々と往くため旗、これこそは、兵が静であるということだ」と。

↓十一万以上と記されている。戦闘は本格化したので、合戦で起きた火災は延焼し、都を灰燼と化し、ほぼ全域が壊滅的な被害を受けた。文明五年（1473）に宗全、ついで勝元が相次いで死去し、ようやく和睦が成立した。文明九年（1477）、諸大名が撤収し、十一年間続いた京都での戦闘は収束した。

義政が築いた 東山文化

戦乱に明け暮れた世にも拘わらず、將軍義政は、文明十四年（1482）、東山山莊（東山殿）を造営し、翌年ここに移り住んだ。会所、常御所などの大規模な建物を建て、工事は死の直前まで八年にわたって続けられた。足利義満の北山殿（後の鹿苑寺、舍利殿「金閣」）が有名なため金閣寺と通称される。ほどではないが、ある程度政治的機能ももっていた。

義政の祖父、義満が建てた金閣をベースにした銀閣を建築した。また山莊を中核として、武家、公家、禅僧らの文化を融合し、幽玄、わび・さびに通じる美意識に支えられて、能、茶道、華道、庭園、建築、連歌などが生まれた。これらの文化は次第に庶民にも浸透してゆく。金閣に代表される三代義満時代の貴族的で華麗な「北山文化」に対して「東山文化」といわれる。

延徳二年（1490）に死去した義政の菩提を弔うため、東山殿は寺に改められ、相国寺の末寺として慈照寺が創始された。銀閣（観音殿の通称）と東求堂は現存している。

義政が東山山莊を造営し始めたころ、東国の江戸では、太田道灌の名声が一際高く、扇谷家中の中傷も激しさを増して、ついに誅殺された。西国に在って、將軍義政は、奇しくも江戸城主、太田道灌とほぼ同時代を生きたのである。



太田道灌の英姿
http://blogs.yahoo.co.jp より引用

詩文は語る・・・

君に対する忠と父に対する孝の両道を守る道灌公は一度怒れば馬に鞭を当てて進み、川を渡って出陣し、針原では激しく戦った。武器には血し、沢は土地が水で潤うものだ。易が、また雷のような響きは威勢を添え、勝どきを挙げたが、なおも休まず、敵を追つて鉢形城をも取り囲み互いに助け合う」とある。この句は、道灌公の徳の恵みがいよいよ豊かになり、万物にまで及ぶことを意味するものだ。



国宝 銀閣（慈照寺）



伝足利義政像
（伝土佐光信画、東京国立博物館蔵）

道灌と義政は同時代を生きた！

西域紀行

その二

深瀬 克

4 一気に進む近代化

現在の中国を見ると、日本の高度経済成長期を圧縮して実現しているように見える。新疆ウイグル自治区は豊富な地下資源に恵まれている。石油・天然ガス・石炭・鉄鉱石・ニッケル・マンガなど、何でもあると言っても過言ではなさそうだ。中国政府はこの魅力あふれる地域の開発に力を入れており、高速鉄道（新幹線）や高速道路の建設があとこちで進行中であつた。また道路沿いに直径1〜2メートルの黒いパイプを延々と敷いていたが、これは天然ガスのパイプラインで、4000km離れた上海までつなげるのだと言う。

ホテルで日本に電話をしようとしたが、国際電話の掛け方の説明書が無い。フロントに行つて英語で尋ねたが、何と誰も英



林立する風力発電の風車

電気バイクに乗るウイグル女性(ウチャに)



ウチャの街を走るロバ車



発として風力発電に力を入れている。日本では北海道で数十台の風車が立ち並んでいるのを見たことがあるが、ここでは砂塵にかすむ遙かなたまで数えきれない風車が立ち並んでいるのは、壮観であると同時に中国の底力を見せ付けられた気がした。ただしチョット気になったのは、林立している風車のほとんどが回転していなかったことだ。現地ガイドに質問すると、『今は風が吹いていないので、風があるときは回っている』とのことだった。

クチャやカシユガル



共産党政府に感謝する看板

5 ウイグル人問題

今回の西域旅行の目的の一つは、ウイグル人たちがどのような生活しているのか、直接聞き取ったことである。しかし、これは中国共産党政府が触れられたくない部分であり、下手をすればパスポートを取り上げられ、最悪の場合は帰国できなくなることもありうるのだ。

新疆ウイグル自治区は、ロシア・カザフスタン・キルギスタン・タジキスタン・アフガニスタン・パキスタン・インドの8カ国と国境を接している。1991年12月、ゴルバチョフ大統領が辞任してソ連が崩壊した時、隣接するカザフスタン・キルギスタン・タジキスタンは独立を果たした。これらの国々の独立は、ウイグル人にも独立への希望を膨らませるものとなった。

しかし、新疆ウイグル自治区は、これからさらに大国を目指す中国にとっていろいろな意味で極めて重要な地域である。中国は「宗教の自由」を建前としては認めているが、イスラム勢力の拡大による独立運動を懸念し、イスラム教徒であるウイグル人を厳しく管理しているようだ。これをウイグル人は差別と受取り、反発を招いている。2009年7月には「ウラムチ暴動」が起き、多くの死者が出た。現在中国政府は地域格差解消のためのインフラ整備を進めながら、分離独立などの不穏な動きは徹底的に押さえ込む、アメとムチの両面作戦を推し進めている。写真の立て看板は中央政府が立てさせたもので、『党中央の親切な配慮に感謝する・全国人

民の大きな支持に感謝する」との内容である。

この大変デリケートなウイグル人問題をどうしても放置することができない私は、『どの程度のウイグル人が活動に参加しているのか』について、周囲に誰もいない時を狙って、慎重に相手の反応を見ながら、現地ガイドの見解を若干ではあるが聞き出すことに成功した。



ウイグル人の現地ガイドと筆者

資金力にモノを言わせて扇動しているのであって、国内のウイグル人が積極的にやっているのではない。海外からの働きかけに呼応しているに過ぎないものだ』と強く主張した。

この程度のやり取りだったが、質問者も回答者も周囲に気を配りながら、緊張感のあるやり取りであった。永年漢族との攻防を繰り返して、支配されてきたウイグル人の目の奥深くに憂いの影が見えたのは、私の気のせいだったのだろうか。

6 反日デモ勃発

旅行の終盤、新疆ウイグル自治区から敦煌（甘粛省）に着いたころ、尖閣諸島を自国の領土と主張する反日デモが燃え上がった。テレビや新聞のトップニュースで大きく報道され、言葉は理解できなくても、その激しさは痛いほど伝わってきた。

ウイグル人の現地ガイドに「反日教育はされているか」と尋ねたが、『そんなことは無い』とのことだった。ウイグル人自身漢族が自分たちの土地に侵入してきていると思っているのだから、尖閣諸島についての領有権を漢族が吹聴しても、ウイグル人は簡単に賛同しないのだらう。

『活動している人がどの程度いるのか情報が無いのでよく分らないけど、ウイグル人には移動のためのパスポートがなかなか発行されないなど、現在も差別があるヨ』と極めて小声で話してくれた。

現地ガイドC（漢族）は、『ウイグル人の反政府活動は、海外に出て成功したウイグル人が、

どこの国に行っても、自分が日本人だと言えなかったことは今まで一度も無かった。しかし、今回は危険を感じて言うことが出来ない。実に残念で嫌な思いになった。添乗員からは、夜の外出は控えるようにとの注意があった。

海外進出を進める企業に対しコンサルタントをしている友人が、最近上海では『だましてもだましても、まだまだまける日本人』という言葉があると言う。日本には「話せば分かる」、誠意は通じるとの考え方があがるが、それも相手次第だと言うことをしっかりと認識しておかなければならない。

(2012/9月8日16日)



反日デモを伝える現地新聞

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は、「市民フォーラム」が編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL 090 (3048) 5502

編集部原宛にどうぞ